

# 生活者定点調査にみる家族の10年 家庭のなかの「個」と、家族の距離感の変化

生活者研究センター  
ライフスタイル研究室

2006年から2016年の10年にわたり、生活者の価値観やライフスタイルの多様化、社会情勢の変化にともなう日常生活の変化を捉えるために定量・定点調査を隔年で実施してきました。本レポートでは、これらの調査の結果から「家族」にまつわる意識の変化を読み解いてみました。

- 暮らしを取り巻く10年間の出来事・トピックス
- 生活満足度の高さは継続、将来不安は上昇
- 家族・夫婦ともに良好な関係を維持
- 親子関係はフラット化の傾向
- 「お互い干渉しない」、程よい距離感が大切
- 家庭をベースに、「自分」のおもいも優先
- 「個」の尊重と適度な距離感が新しい家族のあり方に

## 【調査概要】

「生活者の暮らしに関わる意識と行動」

調査期間：2006年、2008年、2010年、2011年  
2012年、2014年、2016年(いずれも9月)

調査方法：インターネット調査、郵送調査

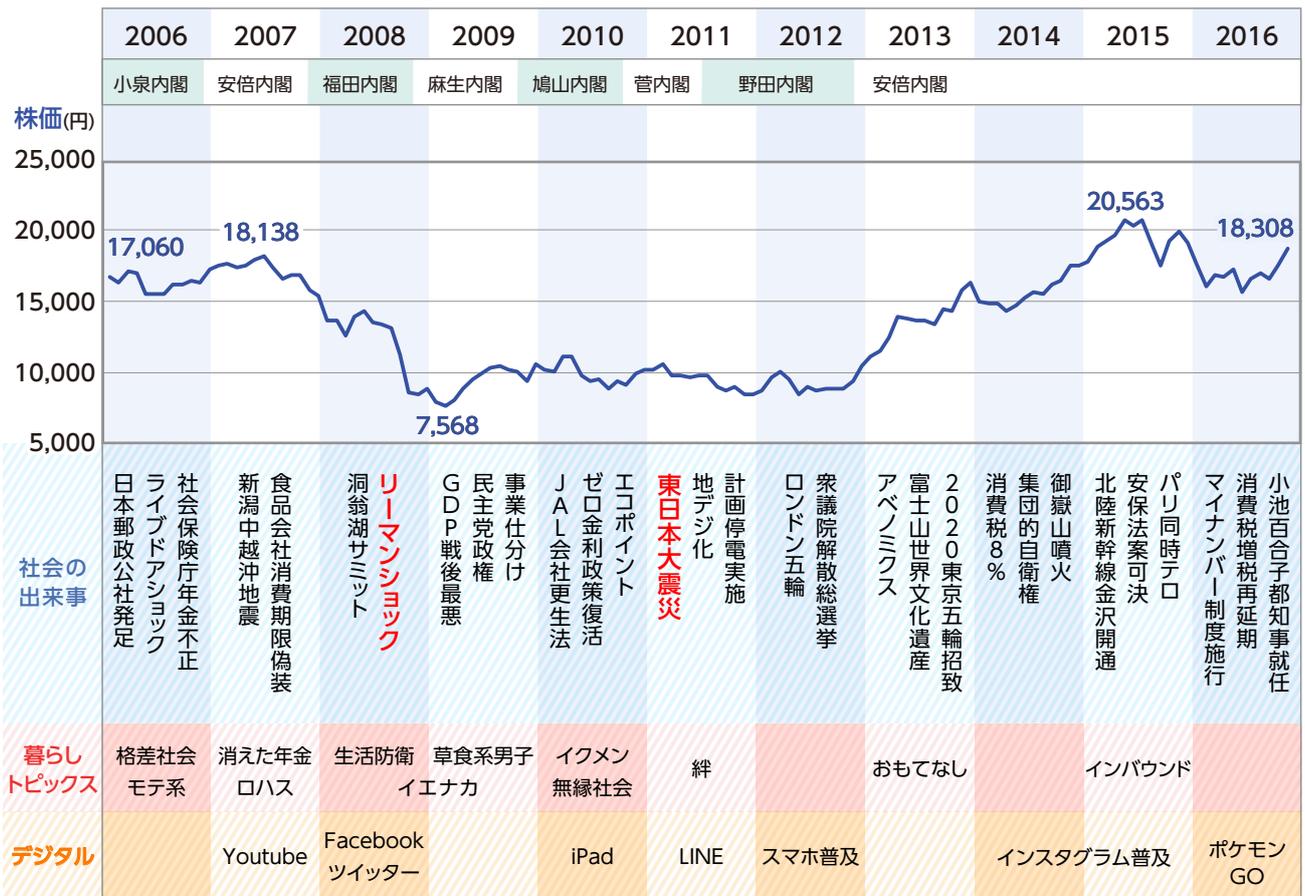
調査対象：首都圏在住20～60代既婚男女

回答者数：2006年 男性269人、女性711人  
2008年 男性256人、女性687人  
2010年 男性820人、女性856人  
2011年 男性537人、女性539人  
2012年 男性896人、女性938人  
2014年 男性864人、女性932人  
2016年 男性890人、女性931人

# 暮らしを取り巻く10年間の出来事・トピックス

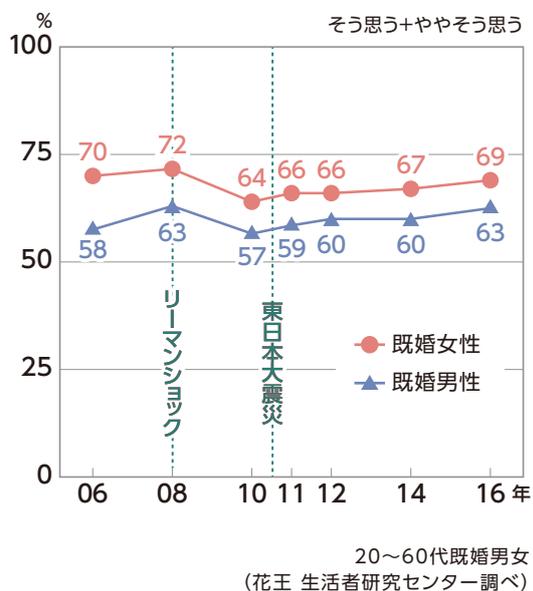
2006年から2016年の10年を振り返ると、小泉内閣に始まり、08年にはリーマンショックで先の見えない不安に直面し、11年の東日本大震災では人と人との「絆」が強まるとともに「生活の見直し」を迫られました。14年の消費税増税を経て、現在はアベノミクスでの好景気が続いています。さらに、共働きの増加、少子高齢化、単身世帯増、SNSの普及などの社会の変化も加わり、生活者の暮らしや家族のあり方が変化してきています。

(表1) 2006年から2016年の出来事

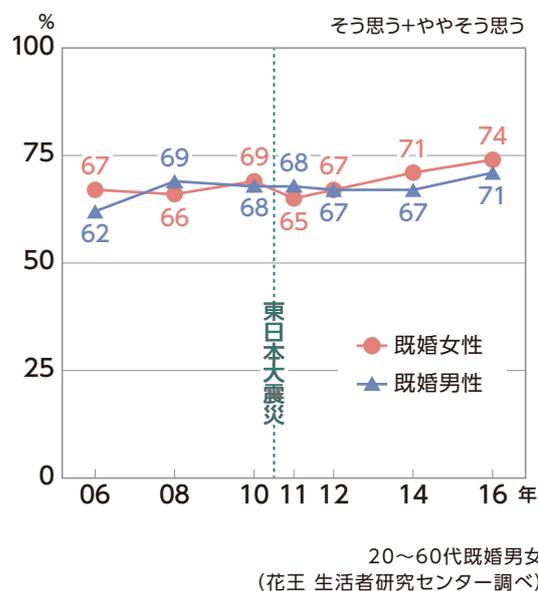


## 生活満足度の高さは継続、将来不安は上昇

生活満足度についてはリーマンショックの直後は減少しましたが、震災を経て再び増加してきており、依然として高い傾向にあります(図1)。一方、自分の将来への不安は徐々に上昇傾向にあります(図2)。



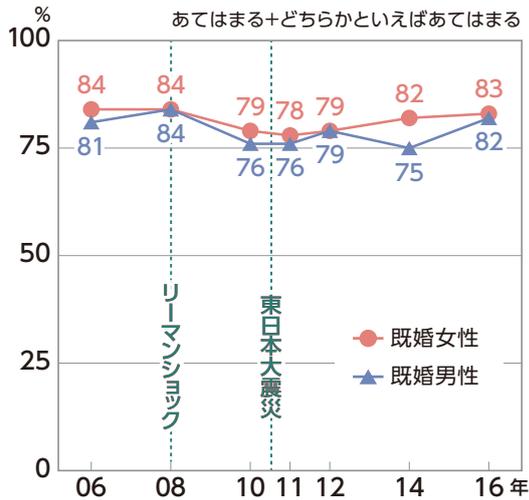
(図1)現在の生活に満足している



(図2)自分の将来に不安を感じる

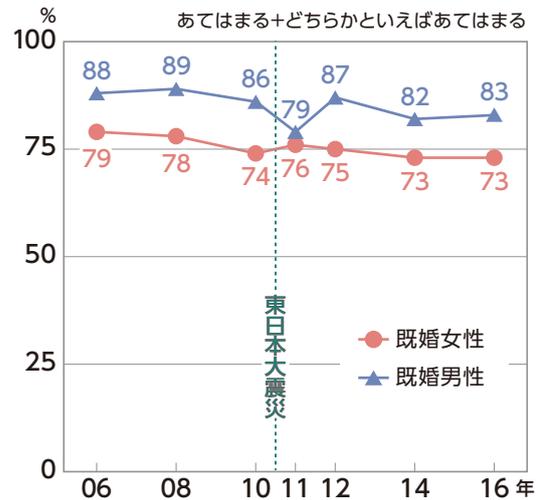
## 家族・夫婦ともに良好な関係を維持

家族の関係をみてみると、「家族とのコミュニケーションは良好」と答えた人は、男女とも約8割と高い状態が続いています(図3)。夫婦関係においても、「妻／夫は、最良のパートナー」との意識は微減傾向にあるものの、約8割と高いままです(図4)。また、「休日は家族で出かけることが多い」では、20～30代の若年は約8割、40代も5割との結果で、家族との時間を大事にしていることがわかります(図5)。



同居家族がいる20～60代既婚男女  
(花王 生活者研究センター調べ)

(図3) 家族とのコミュニケーションは良好である



20～60代既婚男女  
(花王 生活者研究センター調べ)

(図4) 夫/妻は、最良のパートナーだと思う

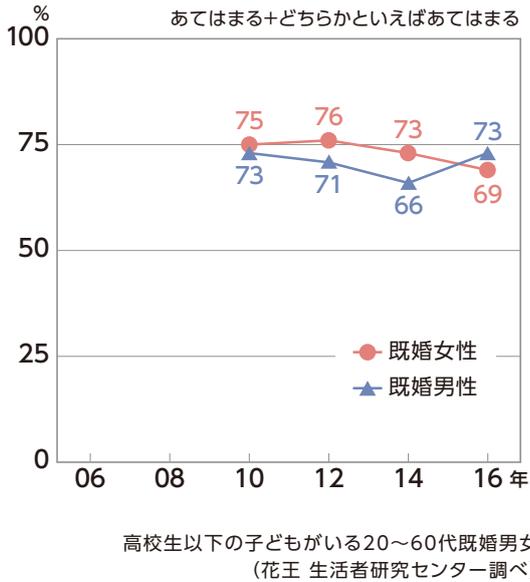


子どもがいる20～60代既婚女性  
(花王 生活者研究センター調べ)

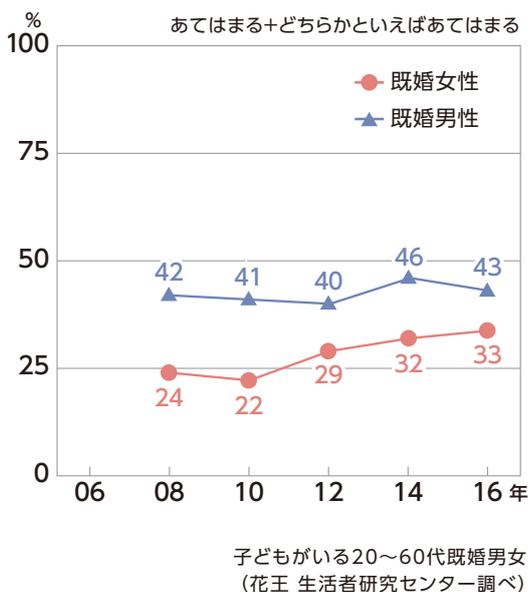
(図5) 休日は家族で出かけることが多い

## 親子関係はフラット化の傾向

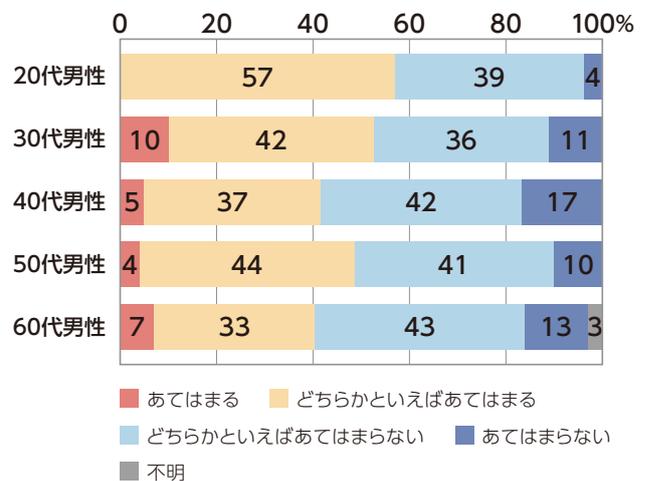
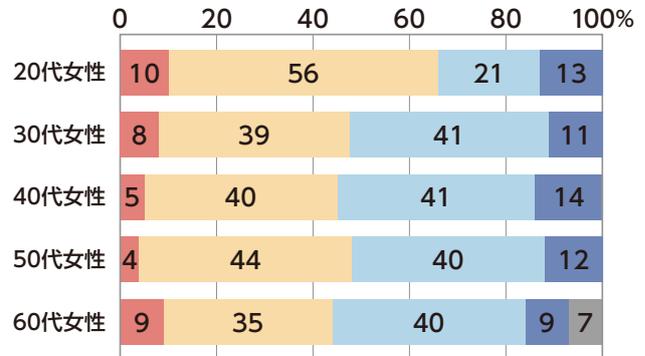
子どもとの関係では、「親であることを楽しんでいる」との回答が男女とも約7割前後で推移しています(図6)。また、「子どもとは友達のような対等な立場で接していきたい」とのおもいが、男女とも4割を超え(図7)、最新(2016年)のデータからは親子の関係性が変わり、フラットになってきている様子も感じられます。その一方、女性の就業率の増加などを背景に、「子どもとの会話の時間がなかなか持てない」と感じている母親が増加し、父親と近づきつつあるのが現状です(図8)。



(図6) 父親や母親であることを、自分はとても楽しんでいる



(図8) 子どもとの会話の時間がなかなかもてない

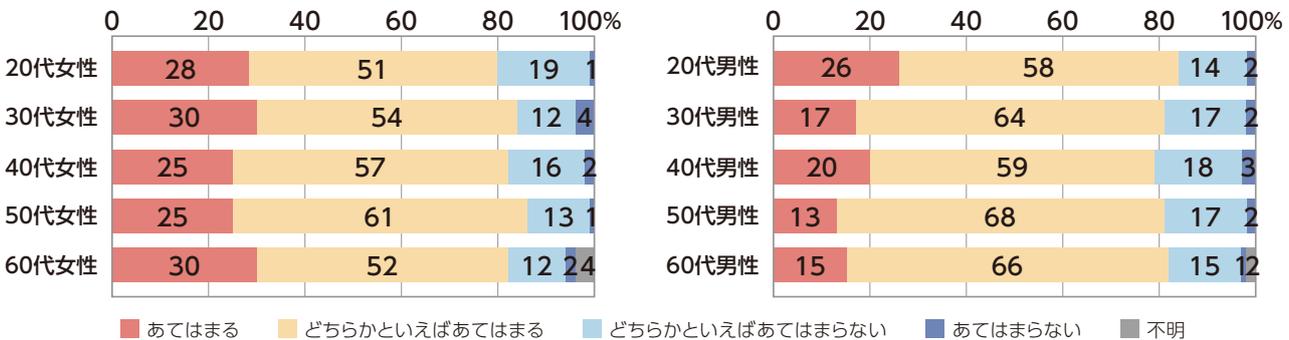
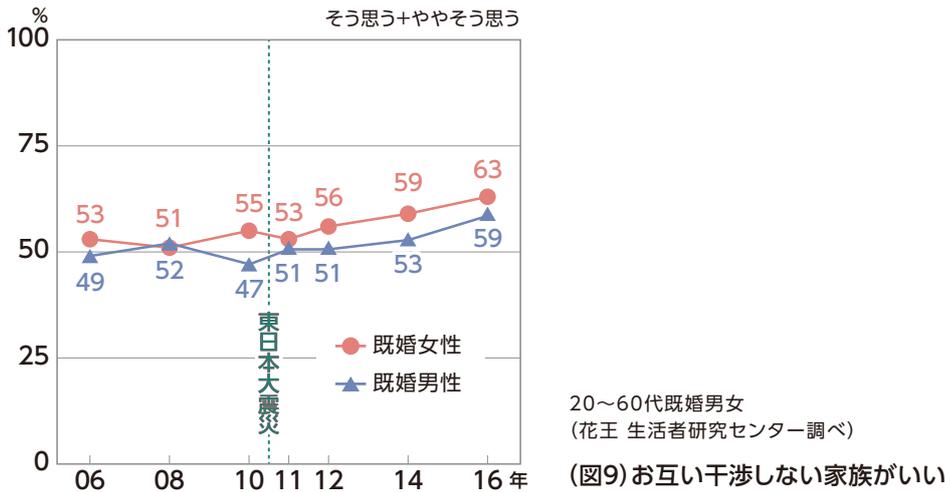


子どもがいる20~60代既婚男女  
(花王 生活者研究センター調べ)

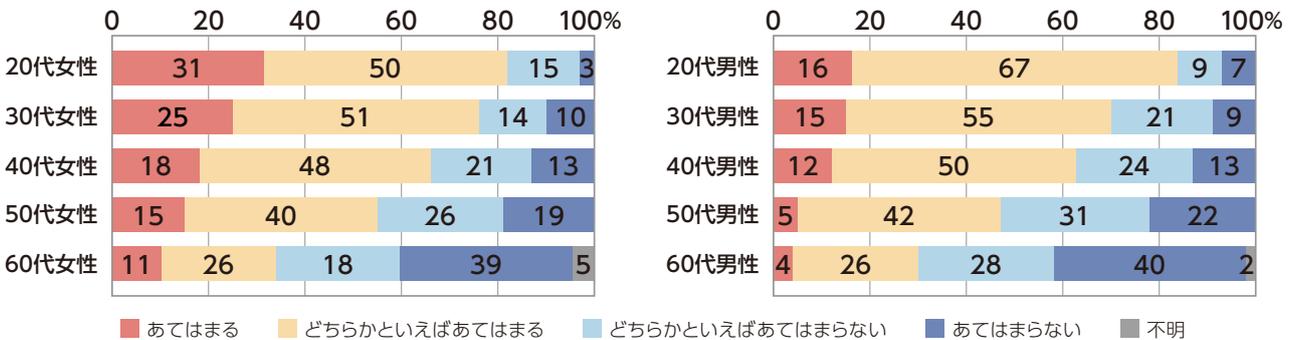
(図7) 子どもとは友達のような対等な立場で接していきたい  
(2016年)

## 「お互い干渉しない」、程よい距離感が大切

家族とのコミュニケーションが良好である一方で、「お互い干渉しない家族がいい」との意識はこの10年で男女とも10%上昇し、約6割まで高まってきました(図9)。最新(2016年)のデータでは、「リビングで家族がそれぞれ別のことをしていても気にならない」との回答が、年代を問わず8割にものびました(図10)。また、「家族が同じ部屋で過ごしているとき、スマホを見たりゲームをしていることがある」と答えた人は、20～30代では7割を超え(図11)、SNSの普及などが家族の距離感にも影響を及ぼしているのがわかります。



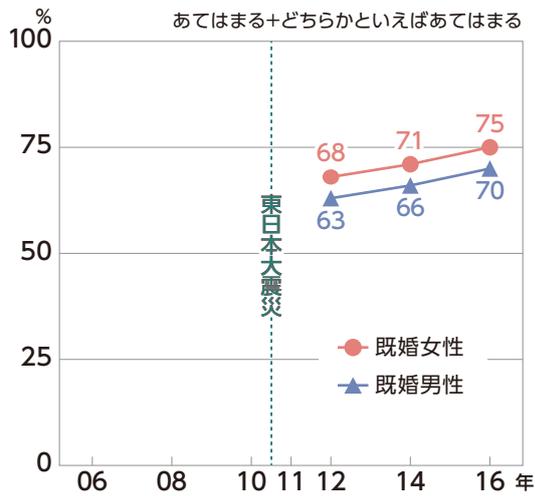
(図10) リビングで家族がそれぞれ別のことをしていても気にならない(2016年)



(図11) 家族が同じ部屋で過ごしているとき、自分はスマートフォンを見ていたり、ゲームをしていることがある(2016年)

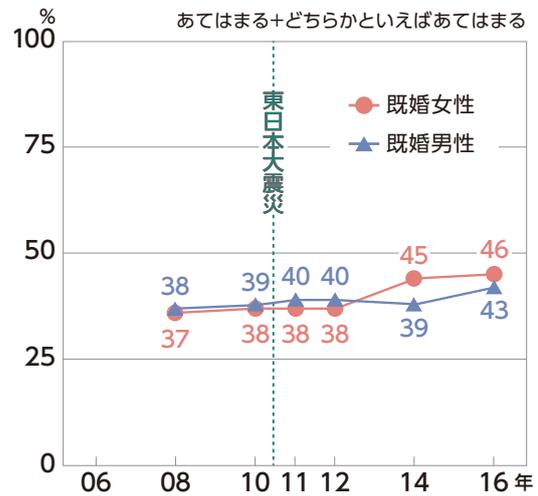
## 家庭をベースに、「自分」のおもいも優先

「仕事より家庭を優先して働きたい」は男女ともに増加傾向にあります(図12)。家庭を大切にしたいとおもい一方で、「家族のことも大切だが、その前にまず自分のことを優先的に考えたい」との意識が2012年以降上昇してきています(図13)。男女ともに、家庭・家族だけでなく「自分」を大事にしたいおもいが高まっているようです。



20~60代既婚有職男女  
(花王 生活者研究センター調べ)

(図12) 仕事より家庭を優先して働きたい



同居家族がいる20~60代既婚男女  
(花王 生活者研究センター調べ)

(図13) 家族のことも大切だが、その前にまず自分のことを優先的に考えたい

## 「個」の尊重と適度な距離感が新しい家族のあり方に

この10年を振り返ると、女性の就業率の増加、スマホやSNSの急速な普及などの変化とともに、世界的な経済不安や未曾有の災害といった暮らしに大きな影響を与える出来事がありました。そのなかで、家族のつながりは良好に保ちつつ、一人ひとりに「個」を大事にしたい傾向がみられ、家族同士であっても程よい距離感のある関係に変化してきたことが読み取れました。「仕事」よりも「家庭」を優先したい気持ちと同時に、「自分」も大事にしたいというおもいが、結果として、それぞれの家族でお互いが心地の良い「つながり方」になっていったものと推察しています。

今後も、さらなる女性の活躍、少子高齢化、単身世帯の増加など社会の変化にともなって、家族の姿がますます多様化し、家族内の役割やつながり方も変わっていくことが予想され、引き続きその変化を追い続けていきます。

●お問い合わせ・ご意見は **花王株式会社 生活者研究センター**

〒131-8501 東京都墨田区文花 2-1-3 TEL. 03-5630-9963(月～金 9:00～17:00) FAX. 03-5630-9584

くらしの研究 <http://www.kao.co.jp/lifei/>

※掲載の記事・写真の無断掲載・複写を禁じます。